第７回合同ワーキンググループ会議

議事要旨

日時　平成 29 年 2 月 22 日（水）　13:30～15:30
場所　本庁舎 2 階　21 会議室
出席　委　員 11 名、事務局 7 名、北　大 4 名

議題　今年度の会議の確認

■　「千歳タウンプラザ」の視察報告

・ まちなか再生担当として、昨年 12 月に千歳市の中心市街地にオープンした「千歳タウンプラザ」を視察した。子どもやお年寄りなど様々な年代の人が利用できる施設として、市民ホール建設の参考になると思うので報告したい。
・ 中心市街地内のデパート跡地であった空施設の利活用の一環として、地下 1 階にパークゴルフ場、1 階にまちライブラリー、2 階に子ども向け遊び場を備えた施設として新たにオープンした施設である。
・ 全天候型パークゴルフ場（地下 1 階）
全天候型で雨の日も利用できる。視察した際は、平日にも関わらず 60～70 代を中心として 30 名ほどの客が利用していた。
・ まちライブラリー（1 階）
まちライブラリーは、市民からの寄贈により蔵書を増やしていく新しいスタイルの図書館である。最近では大学のフリースペースやコミュニティカフェなどで取り組まれており、千歳タウンプラザでは、あらかじめ蔵書を 6,000 冊ほど用意し、取組をスタートさせたそうだ。
・ あそびのくに ピッピちとせ（2 階）
子ども向けの遊び場であり、1 クール 2 時間として 1 日を 3 クールに区切っている。視察の際は、平日にも関わらず 20～30 人の利用者がいた。
・ 料金体系
パークゴルフ　　1 日券 800 円／半日券 500 円
まちライブラリー　閲覧無料／貸出は 1 人 2 冊までで初回 500 円でカード作成
ピッピちとせ　　1 クール 350 円

■　前回までの振返り（活動 WG）

<u>キーワード「まちづくり」に関するアイデア</u>

1. 進め！カルチャーバスクラブ

- 文化芸術活動をバスツアーなどの交通とセットにした企画を実施するアイデアである。新しい施設が出来た際の交通手段をどのように担保するのかという視点から発展したアイデアである。

2. 苫小牧の味を守る会
   - 演劇や音楽の鑑賞のみが文化芸術活動でなく、食も地域に伝わる身近な文化であるという考えから、苫小牧独自の食文化を様々なイベントや企画を通して展開していくアイデアである。

■　前回までの振返り（鑑賞 WG）

<u>キーワード「まちづくり」に関するアイデア</u>

- 「まちづくり」という漠然としたテーマに対し、広域的な文化芸術活動を軸に議論し、それらの活動の展開が結果的に「まちづくり」につながっていくようなアイデアを目指した。

1. どこでもアクション実行委員会
   - スタジオにあるピアノや練習室にある鏡など従来決まった諸室に備えられている物品を持運び可能とし、ホワイエなどの共用空間を含む様々な場所で活動を可能にする物品管理のアイデアである。
2. まちなかスタジオ設計室
   - 中心市街地が抱える空き家や商店街の空き店舗といった課題に対し、それらを文化芸術活動の活動場所へと転用するアイデアである。文化芸術活動の広域的な展開が、中心市街地の活性化にもつながるという視点から発想したアイデアである。

■　前回までの振返り（展示・窓口 WG）

<u>キーワード「まちづくり」に関するアイデア</u>

1. 施設運営アカデミー
   - 市内各所で展開されている個別の活動をつなげていくことが、結果的に市全体のまちづくりに結びつくと考え、市内の施設スタッフの育成を一括して行い、施設間の連携を行なっていくアイデアである。
2. 広報とまこまい増刊号　文化編集部
   - 多くの市民の目に触れる広報の情報発信ルートを利用し、文化芸術活動を市民全員の手に届くようにするアイデアである。
3. 北の歳時記～アウトドア展示推進企画室～
   - 屋外スペースを積極的に考えることで、文化芸術活動に興味・関心の薄い市民の来訪を狙ったアイデアである。その際、季節ごとの展示を展開し、いつ来訪しても新しい発見が得られるような施設づくりを行っていく。

■　今年度の振返り

・　今年度 WG 会議では、新しい施設で実施していく事業アイデアの検討を行ってきた。WG は 3 つに分かれ、それぞれ「活動」、「鑑賞」、「展示・窓口」と新しい施設が備えるべき基本的な機能にもとづいた検討を行ってきた。

・　その際、基本構想で示されている「日常的利用」などのキーワードをもとにした検討を行い、1 回の会議で 2 つ、3 つのキーワードを取り上げ、それにまつわる事業アイデアについて意見交換を行ってきた。

・　それぞれの WG の特性を生かしながらの検討ができており、どの回も充実した意見交換ができていた。

・　活動 WG では、「プロ・セミプロとの協働による文化力の向上」、「具体的な年齢層や使い手を意識した検討」、「市民の要望を着実に実現できる環境整備や仕組み」といったように、現在委員の方々が行っている活動の中での実感にもとづいた検討を行った。

・　鑑賞 WG では、「施設の建設を契機とした芸術文化活動の活性化」、「芸術文化活動を通じた交流・仲間づくり」、「施設全体・市全体で活動を展開していくための必要性」といったように文化芸術活動の特性を生かした事業アイデアについて検討を行った。

・　展示・窓口 WG では、「継続的な来訪を促す工夫や仕掛け」、「具体的な使い手や場所を想定した検討」、「全市民の施設利用を促進する公共交通や広報との組み合わせ」といったように、施設が日常的に利用されるための仕掛けや工夫について検討を行った。

■　アイデア集についての意見交換

①　<u>現在の活動と新しく始める活動を関連させていくことの重要性</u>

・　現状の文化芸術活動の中で感じている課題や可能性から、新しい施設の活動事業のアイデアを検討していったように思う。活動事業を考える際には、それを実現するための道筋や見込みを考えなければならないが、そういったときに現状の文化芸術活動を見直すことは大変有意義である。現状として、委員が展開している文化芸術活動にはどのようなものがあり、そこからどういった経緯で事業アイデアにつながっていったのかもう少し詳しく伺いたい。

・　「見習い親父バンドプロジェクト」については、駒澤大学附属高校吹奏楽部の OB が指導者となり、初心者の大人たちに楽器を教えている現状を踏まえてアイデアを出した。大学生にとって楽器を教える相手が、自分より年下の場合と年上の場合では伝え方が大きく異なり、特に年上に教える場合には、指導をしながらも生徒である大人たちから社会的なマナーや礼儀を教わる場にもなっている。組織の体制など徐々に確立されつつあるので、新しい施設でも実施できるのではないかと感じている。

・　音楽学校への通学やどこかに習いに行くということまでするのではなく、少し身近な人に教えてもらう機会があれば、興味の惹かれる人が増えると考えられる。さらに、それが単にレッスンだけではなく、施設を通じて知合いができたり、若い人と触れ合

える機会にもなれば、市民の交流機会を提供する公共施設としての役割も非常に大きなものとなるだろう。

- 苫小牧の文化芸術活動の歴史として、過去にはクラリネットやギターの初心者向け講座が開かれ、講座に参加した人が集まってサークルを立ち上げてきたこともある。現在ではそれらの活動はなくなってしまったが、そういった蓄積を新しい施設のプログラムにうまく組み込むことができれば、苫小牧の文化芸術活動がより一層活発なものになると思う。
- 鑑賞 WG では、「じわじわキャンペーン」などでみられるように、新しい施設の建設をきっかけとして苫小牧の文化芸術活動を盛り上げていきたいという思いからアイデアを検討してきたように思う。そういったアイデアが出てきた背景や、日頃実感している思いについてもう一度確認しておきたい。
- WG 会議の議論を通じて、異なるジャンルの人が交わって活動することの楽しさや可能性を実感している。そういった文化芸術活動の面白みを施設ができてから実感するのではなく、検討段階からじわじわと市民にもその面白みを実感してもらえれば、新しい施設の建設自体が苫小牧の文化芸術活動における大きなムーブメントになるのではないかという議論があった。
- ここから施設ができるまでの間には、まだかなりの時間がある。施設ができてから「さあ何をしようか。」ということではなく、施設ができる前から市民が施設での活動を楽しみにできるような仕掛けづくりが重要であり、WG メンバーの方々には積極的に周りの知人や友人に働きかけていっていただきたい。

② <u>年齢を対象としたスペースづくり</u>

- 振返りの中で、「具体的な年齢層や使い手を意識した検討」とあったが、特定の世代を対象とすると世代間の交流や接点が生まれにくくなってしまう可能性がある。具体的な年齢層や使い手を意識し、それぞれの対象に楽しんでもらいつつも、同時に世代間がどのように関わり合っていくのかを検討する必要がある。年齢層について言及しているアイデアのイメージと、それ以外の世代がどのように関わるかを聞かせていただきたい。
- 具体的な年齢層を意識した議論については、展示・窓口 WG において、子どもやお年寄りだけではなく、働き世代の居場所を考えていくべきという議論があった。(坪内)
- 苫小牧でコーヒーを飲むとなると、まずイオンのスタバが思い浮かぶが、休日となると大混雑になる。イオンの他にも少し落ち着いてひと休みできる場所があれば良いと考え、新しい施設の中にカフェをつくるという意見を出した。また、自身の仕事の中で子育て世代の方と交流する機会があり、子どもを連れて休むことのできる場所が欲しいという声をよく聞く。単にカフェではなく、託児所が備わっているなど、広く市民の方々が利用できる工夫や仕掛けが必要だと感じている。

- カフェの意見が出た際には、新千歳空港にあるフードコートのような、子どもが遊べる場所もあり、いろんな店舗から各自の好きなものを持ってきて過ごせる共有スペースの様子をイメージした。また、施設のテーマでもあるサードプレイスを考えた際に、働き世代に焦点が当てられることが少ないように感じており、働き世代が仕事から少し離れてリラックスすることのできる環境を用意すべきだと考えている。
- 世代間の交流については、文化芸術活動を通じて親子の関係を見直すアイデアもあった。世代間の交流を考える際は、年齢層の違いだけではなく、対象とする人同士の関係性も意識する必要があることを認識できた。
- 苫小牧で子どもを連れて遊ぶというと天気に左右される場所が多く、特に冬の遊び場については悩みを抱えている。千歳タウンプラザのような場所が苫小牧にもあれば良いと思うので、新しい施設には是非取り入れてもらいたい。
- 現状では子どもを遊ばせるためにどこかへ出かけると、子どもの安全と安心を第一に考え、親の居場所や居心地まで考えられず、諦めてしまうという状況が多い。子どもは子どもで遊べて、親もそれなりの滞在ができるような環境があれば、もっと良い場所ができると思う。そういった意味で、幅広い世代の人が楽しめる場所を用意すると同時に、それらが同居できることが重要である。

③ <u>情報発信と芸術文化を通じた仲間づくり</u>

- 振返りの中で「施設の建設をきっかけとした芸術文化活動の活性化」とあったが、いかに様々な芸術文化活動を市民の方々に知ってもらうかという情報発信の仕組みが重要だと考えているが、どういった議論があったのか聞かせていただきたい。
- 「こども特派員」については、「とまこむ」からの示唆を含め議論をしてきた経緯がある。Face to Face の顔を合せた関係については大変参考になり、記者となった子どもたちがイベントを一連の記事にすることで、演者や情報を受け取る市民にとって情報がより身近になるというアイデアに発展することができた。
- 知人が情報発信の媒体に載っていると、気になって手に取ることがあると思う。また、媒体での掲載をきっかけに周りの方々から声をかけられるなど情報共有のきっかけになるのではないか。
- 「とまこむ」では過去の情報は掲載せず、全てこれからの予定・告知を載せているということだった。「子ども特派員」のアイデアは、子どもが取材することで、過去のイベントの報告も単なる報告ではなく、子どもが何を感じたかといった生きた情報として記事にすることができる。
- 「サイン考案部」のアイデアについては、サイネージのような変化のある情報発信は目につきやすいので、地域の話題を発信していけば市民に興味を持ってもらい、集客につながるのではないかと考えた。
- 情報の性質を工夫していくことも重要だろう。単なるイベントの日時などの告知だけ

ではなく、誰が関わっているものなのかを発信するなど、市民により近づいた情報発信をするのが良いのではないか。

- どの WG でも SNS をいかに利用するか議論が交わされていた。しかし一方で、SNS を通じた口コミの情報発信だけではなく、施設に来訪してはじめて得ることのできる情報や、偶然の出会いや交流をきっかけに得られる情報の重要性を意識したアイデアも出ていた。

④ <u>日常的な居場所につながるアイデア</u>

- 基本構想でも重要なキーワードとして「サードプレイス」を掲げてきた。サードプレイスはリピーターとも関連しており、明確な目的はないが何となく心地良いから繰り返し訪れることが公共施設として重要である。お金を払わなくても立ち寄り、滞在できることが大切であり、そのような日常的な居場所につながるアイデアについてどのような議論をしてきたのか紹介いただきたい。
- 居場所や居心地について重点的に議論をしたのは、展示・窓口 WG であった。カフェなどもその一例であるが、「魅せる事務室」はスタッフと来訪者の関係に着目したアイデアである。
- ホテルなどでもフロントの対応が重要となる。楽しいことを見つけに施設に訪れたのに、フロントのスタッフが忙しないと市民にとっては近づきにくい。コンシェルジュが声をかけて迎えてくれるような環境を期待したい。
- 事務所スペースで良いと感じた事例として、岐阜県岐阜市にある「みんなの森ぎふメディアコスモス」がある。そこでは、事務所スペースがいわゆる従来の窓口のつくりではなく、職員が大きな空間の中で利用者からも見られる場所で仕事をしていた。利用者の視線もある中で、職員の方々が誰にでも声を掛けやすい環境をつくっているように感じられた。
- アイビープラザを建設する際に、「魅せる事務室」と同じように事務室を開かれた場所にしようと検討したが、玄関から入ってくる外の寒さを理由に結局壁が立てられてしまった。設計上でもしっかり考えられなければならない。

⑤ <u>管理運営体制について市民が関わっていくことの重要性</u>

- 管理運営体制は今後、大きな課題となる。従来では特定のイベントを特定の組織が主催していたが、これからは市民の組織が主体性と責任を持って積極的に施設を使いこなす意識を持っていくべきだろう。管理運営に市民が積極的に関わることの重要性について WG 会議でも議論があったようだが、どのようなイメージで何に重点を置いて議論されたのかお聞きしたい。
- 鑑賞 WG では、WG のメンバーや組織の体制に大きな可能性を感じており、施設建設後もこういったメンバーで議論を継続し、市民を巻き込み苫小牧の文化芸術活動を活性

化させていけたら良いのではないかという議論があった。

- 活動 WG では、指定管理者制度の仕組みや課題についての議論があった。現状として、市内それぞれの施設の指定管理者が別の業者であるため、連携をとるのが難しい状況になっている。
- 今回は市民会館の建替えではなく、施設の複合化なので活動のバリエーションは現在よりも増えることとなる。事例紹介にもあったアオーレ長岡では、イベントなどの事業をマネジメントする組織と市民が中心となる二つの NPO 組織があり、後者はハードのマネジメントは一切せず、市民のサークルの状況を把握し、新しく活動をする人がどこで何をすれば良いのかといった相談を受ける役割を担っている。その際には相性が良いサークルなどをマッチングさせることを含め、新たなプログラムを提案しマネジメントしていくことになる。そういった事例では、指定管理者とは別に事業マネジメント組織と連携することで、イベントなどを展開する組織体制が整っている。新しい施設でも、市民の活動を把握する NPO 組織を立ち上げることを検討していただきたいと期待している。

■ **今年度の検討の意義について**

- 今年度の成果を確認するとともに、来年度以降に行うことをイメージしてもらうために、建物が出来上がる一連のプロセスについてお話ししたい。
- 建物ができるまでには、〈企画〉・〈計画〉・〈設計〉・〈建設〉・〈運営〉・〈解体〉という流れがある。昨年度に策定した基本構想と、今年度取り組んできた活動事業アイデアの検討は、上記の流れに当てはめると〈企画〉にあたる。その次の〈計画〉というのは、〈企画〉で検討してきたものを実現するための建物の諸条件をまとめる部分である。さらに次の段階の〈設計〉でようやく設計事務所などが関わり、実際の建物の検討に入ってくる。
- 〈企画〉と〈計画〉は公共施設では発注者側の仕事となり、本件では苫小牧市にあたる。すなわち、この WG は設計する側の立場ではなく発注者側の立場で議論をしていただいていることになる。発注者の立場として重要なことは、施設でどのような活動や事業を展開していくことを想定しているかを設計者に正確に伝えることであり、そのために基本構想と基本計画がある。
- 建物を発注するタイミングは、一般的に〈計画〉の後となる。その際に、発注方法は現在では従来型の入札方式とは大きく異なっていることを理解する必要がある。入札とは、設計から施工までをセットとにした建設費を業者に提示させる方法である。入札が成立するためには、業者が適切に見積もりを立てる必要があるため、発注者側が入札前に建物の仕様を全て決めなければならない。それを仕様発注という。
- しかし、ある時期に入札において設計と施工が同じ業者であることの問題が指摘され始めた。設計監理というのは工事の内容が設計通りに行われているかをチェックする

役割であるのに、同じ業者が設計・施工をして、チェックするのでは全く意味がないという指摘である。そうした経緯から入札制度が見直され、まず設計者を決め、設計が終わった後に、その設計内容で施工者を決めるという2段階のプロセスを踏むことになっていった。

- それに従い発注方法や発注で重視すべきポイントも異なっており、現在では建物が実現すべき方向性と、それらの実現のために建物が備えるべき性能を提示することが発注の際には重要になっている。すなわち、発注者は、その建物で何が実現したいのかという〈企画〉・〈計画〉の部分を十分に用意し、明確に伝え、設計事務所からそれを実現するための仕様の提案を受けるようになってきたということである。つまり、基本構想・基本計画で議論するのはその建物で何をしたいのかといったことであり、それらが出てこない場合には設計者も仕様を提案しづらく、標準的な仕様の提案しかできなくなってしまう。
- このような一連の建物の建設プロセスの中で今年度の成果をみると、この1年を通して検討してきた活動のイメージが盛り込まれた事業アイデアは大変有意義なものであるといえる。
- 例えば、ホワイエというのは、ホールの入口前につくられる。歴史的には劇場は貴族の娯楽の場であり、劇の合間に社交の時間としてホワイエが使われるというのがもともとのホワイエの位置付けであったが、現在のホワイエは避難空間の位置付けとなっている。劇場ホールには不特定多数の人が密室に閉じ込められる状況が生まれるので、彼らが一斉に外に避難するための干渉空間としてホワイエが必要ということである。設計仕様としても、ホールの席数に対してホワイエの必要面積が割り当てられることになる。つまり、もし発注者側がホワイエでの活動を何も提示しなければ、設計者は避難空間として必要になる面積と仕様でホワイエをつくることになる。しかし、ホワイエでの活動イメージを用意し正確に伝えれば、設計者はそれに適した配置や面積で提案することになる。今年度検討してきた活動事業のアイデアというのは、まさにそういった活動イメージを丁寧にまとめたものであり、設計者に新しい施設で何をしたいのかを伝えるものとして、非常に意味のあるものになっている。
- 来年度は、今年度議論してきた活動イメージをもとに、それらを実現するための建物の諸条件をまとめていくことになる。具体的には、建物と駐車場の配置や周辺からのアクセスなどといったゾーニングをどうするのか、建物としてどのような高さのボリュームで建つのかといったことを議論していくことになる。それに向けて検討委員会とWG会議が合同でデザインワークショップを行っていく予定である。

■ **今後のスケジュール**

次　回(合同会議)：3月22日（水）14:00～@市役所2階21会議室